NISHI AYANO

テクノロジーと法の未来へ

Vol.21

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

さらなる学びを求めて新設の大学院へ

国際情報研究科修士課程1年／私立江戸川女子高等学校（東京都）出身
西（にし） あやの

大学院への進学

私は、2019年4月に新しく開設された国際情報学部に1期生として入学しました。当時は、期待と不安が入り交じる気持ちだったことを覚えています。しかし、不安は学生生活とともに消え、大学4年間はチャレンジ精神豊富で積極的な同期の仲間たちに囲まれて充実した時間を過ごすことができました。また、国際情報学部で学んだ「情報の仕組み」と「情報の法学」、そして「グローバル教養」を融合させた新しい教育分野は、開拓すべき未開発の領域も多く、各分野に精通し最先端の研究をされている先生方の授業を受講することは、私にとって良い刺激となりました。

私が大学院の進学を考えたのは、大学2年次の夏頃です。大学でさまざまな授業を受講しているうちに、AI・ロボット法分野に興味を持ちました。当分野を学修すればするほど、奥深さや課題などを発見することができ、さらに専門的な知識を平野先生のもとで学びたいと思い、大学院への進学を志すようになりました。2023年4月、国際情報学部卒業後すぐに国際情報研究科（大学院）が開設され、さらに深い専門的な知識を学ぶ機会を頂けたことを非常にうれしく思います。

私の研究分野

大学・大学院を通して、私は完全自動運転車事故時の損害賠償制度についての研究を行っています。AI技術および自動運転が社会に受け入れられ、運用が活性化されていくためには、法的基盤の整備が不可欠です。なぜなら、AIを含む新興技術に対して人々は不安を抱いており、事実、AIには不透明性や制御不可能性等々のさまざまな欠点が存在することが明らかになってきているからです。その不安を取り除いてAIが人々に受容されると同時に、事故および損害発生時に予想される混乱をあらかじめ取り除いておくためには、法的紛争に至る以前に、法的紛争を予防する「予防法学」を今から検討する必要があると私は考えました。完全自動運転車による事故は、技術の高度化、複雑化による立証の難しさ、およびトロッコ問題時の責任所在が不明であることなどから、既存の日本の不法行為制度や損害賠償制度では被害者救済が難しくなったり、不公正になったりすることが予想されています。また、製造者のみにすべての責任を負わせれば済むという安易な主張も散見されています。しかし、それでは必ずしも非難可能性があるとは限らない製造業者に不当に不法行為責任を押し付けることになり、かつ開発意欲をも萎縮させる恐れがあります。そのような事態を防ぐ手段として新たな法制度を模索する必要性を感じ、今回の研究に至りました。

論文では、EUやアメリカでの議論を紹介・比較しながら日本の不法行為制度やそれを微調整した自動運転車事故に対

1

2

3

1 iTL のロゴと　2 2023 年 3 月国際情報学部卒業式　3 国際情報研究科 1 期生の同期と

する損害賠償制度修正の学説の限界を述べ、自動運転車の法的問題を公正かつ効率的に解決しうる提案を紹介したいと考えています。AI・ロボット法学に詳しい有識者の方々のみならず、もっと多くの人に当分野について知ってもらえるような論文を執筆し、日本国内でこれから起こる可能性のある完全自動運転車やAIの法的問題の議論活性化につながればよいなと思っています。

大学院の授業風景

大学院では、学部生時代とは異なる専門的な授業と仲間に囲まれ、日々新たな発見がたくさんあります。

大学院の授業時間は、主に平日の夜間と土曜日です。平日はオンライン授業システムも活用しているため、働きながら大学院の修了が可能です。そのため、同級生には社会人として普段は働いている方も多く、社会人学生の方々からの実務経験を経たうえでの意見や考察はとても参考になります。

先生方は、最新のニュースや動向などをいち早く授業で話題にされます。最近取り沙汰されているChat GPTについても、「情報の仕組み」と「情報の法学」双方の観点からの意見をうかがえるのは国際情報研究科ならではだと思います。研究指導は主査と副査の3名の先生が担当してくださるため、より学際的な視点から研究を行うことができます。

大学、そして大学院も1期生としての入学となりました。1期生として培ったチャレンジ精神や新しいことに前向きに取り組む姿勢は、自身の大きな成長につながりました。今後も大学院を通して学びをさらに深め、大学院の仲間たちと切磋琢磨しながら研究と論文執筆を進めていきたいです。